

# 成瀬仁蔵の蔵書調査（第1報）

旧成瀬仁蔵宅と関連人物を中心に

小林 陽子\*

The Private Library of NARUSE Jinzo ( 1 )

Former House of NARUSE Jinzo and his Associated People

KOBAYASHI Yoko

キーワード：成瀬仁蔵，家政学，蔵書

Key Words: NARUSE Jinzo, Home Economics, Private Library

## 1. はじめに

わが国の女子高等教育の黎明期に、成瀬仁蔵（1858-1919）が日本女子大学校（現・日本女子大学）を創設し、女子固有の学問として家政学を位置づけたことは周知のことであろう。

成瀬は読書家として知られ、とくに洋書は丸善や教文館などから多量に購入することで有名であったといわれる<sup>1</sup>。哲学・倫理・宗教・教育・婦人問題をはじめ、その内容は広範囲にわたる。こうした読書を基礎として、日本女子大学校の教育方針や教育実践の要であった全学生必修科目、実践倫理の講義を行ったといわれている。しかし、成瀬の日本女子大学校家政学部における具体的なカリキュラム作成に目を転ずると、アメリカ家政学創設に指導的役割を果たした「家政学の母」、 「エコロジーの創始者」と称されるエレン・スワロウ・リチャーズ（1842-1911）の著書3点が、これらの蔵書から確認されるものの、直接的な糸口をみつけることはできない<sup>2</sup>。

ところが10数年前、成瀬のものと思われる図書が、彼が1901（明治34）年の学校創設から1919（大正8）年に没するまで居住した校長宅敷地から、多数発見された。図書といっても雑誌やパンフレットなどの類であるし、またこれらのなかには年代的に成瀬自身の書物ではあり得ないものが散見され、資料としては正確さに欠く。成瀬の死後、校長宅が大学関係者数人に居住・使用されたことや戦中の疎開が要因のひとつであるように思われる。資料的価値やその他さまざまな問題が交錯したのだろう、不幸にもこれまで成瀬の図書は誰からも精査されることなく、日本女子大学附属目白図書館に放置されたままであった。いつどのような経緯で図書館に保管されるようになったのかさえ、今はもうはっきりしない。

しかし筆者の調査から、発見されたものにはアメリカを中心とした大学のシラバスやカタログが

---

\*鳥取大学地域学部地域教育学科

100冊近く含まれ、成瀬のカリキュラム作成研究には有効と思われた。シラバスやカタログに限って言えば、成瀬が女子高等教育を腹案した彼のアメリカ留学から没するまでの期間のみ存在し、成瀬の図書である可能性は極めて高い。とりわけ1910年代のものが多く、この時期は教育調査会、臨時教育会議にて、成瀬が女子高等教育論議をリードしていた彼の晩年に対応する<sup>3</sup>。女子高等教育史の視点からも、家政学史の視点からも大変興味深い年代である。

そこで本研究の課題は、第1に旧成瀬仁蔵宅敷地から発見された蔵書の出自を明らかにすることである。その上で、大学のシラバスやカタログに着目し、1910年代における女子高等教育論議や、成瀬の晩年の女子教育思想を知る重要な著書である『女子教育改善意見』(1918)に述べられた「女子総合大学構想」を中心に分析し、成瀬の家政学におけるカリキュラム作成について何らかの示唆を得たい。これを第2の課題とする。

本稿第1報ではその序説として、これまでの成瀬の蔵書について、以下の3点を整理しておきたい。第1に蔵書が発見された旧成瀬仁蔵宅とそこに居住した住人の変遷、第2に成瀬の蔵書疎開について、そして第3に1976(昭和51)年4月から1983(昭和58)年8月まで行われた、同宅に管理されていた成瀬の遺品や蔵書の整理についてである。こうした作業をとおして、本研究課題の検討事項を明確にし得ると考える。

## 2. 旧成瀬仁蔵宅の居住者

### (1) 旧成瀬仁蔵宅の概要

旧成瀬仁蔵宅は教師用住宅「教師館」のひとつとして、日本女子大学創校時1901(明治34)年に建設された<sup>4</sup>。創立時の建物は、教師館3棟、校舎2棟、理化教室、寮舎2棟であった<sup>5</sup>。これら主だった建物が残っていないなかで、旧成瀬宅は現存する唯一の遺構である。木造2階建ての住宅は、外壁は押縁下見板張、屋根は棧瓦葺で、外観は伝統的な和風の住宅建築である(写真1)。所在地は変わらず、東京都文京区目白台2丁目8番1号の日本女子大学目白キャンパス内にある。

鈴木賢次らの復元した創建時の平面図をみると(図1)、台所などを除くすべては畳敷きで、廊下がまったく無いながらも、各部屋の独立性を保った間取りであることがわかる。便所も3か所



写真1. 旧成瀬仁蔵宅外観

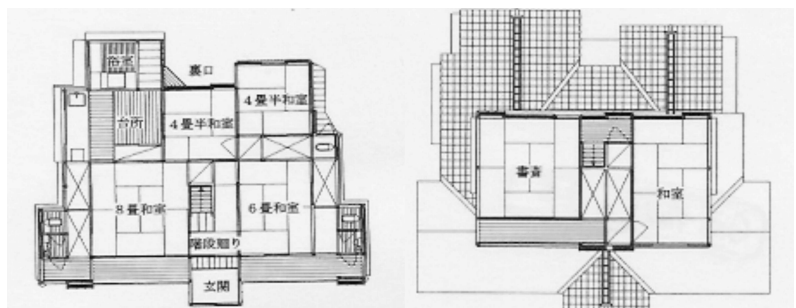


図1. 旧成瀬仁蔵宅 創建時の平面図

出典 鈴木賢次ら「日本女子大学成瀬記念館分館(旧成瀬仁蔵住宅)に関する研究」『日本女子大学総合研究所紀要』第7号, 2004年

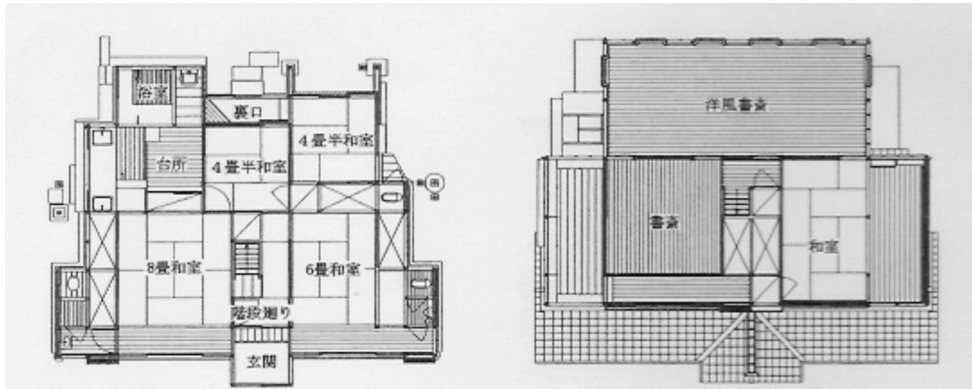


図2. 旧成瀬仁蔵宅 改築後の平面図

出典 鈴木賢次ら「日本女子大学成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）に関する研究」『日本女子大学総合研究所紀要』第7号，2004年。

あり、教師館として数人の教員が住めるように、部屋を配置したのであろう。

大正期になると、2階部分の大規模な拡張工事が行われ、東西両側それぞれ1間分と背面北側で増築された（図2）。正面西側の増築部分には、西・南・北の3方面に書棚が作り付けされている。

成瀬没後、画家大橋了介が生前の成瀬を偲んで描いた4枚の油絵には、校長宅外観、2階の3部屋がそれぞれ描かれている<sup>6</sup>。2階正面南側の書斎は応接室としても使用され、洋風の机と椅子が配置された。背面北側の洋風書斎は中央に5～6人座れる大きな机が置かれ、机上には蔵書目録用の大型カードケースがあった。ここは「書庫兼帯の勉強部屋」として使用された<sup>7</sup>。正面東側の畳部屋は成瀬の寝台が置かれた寝室であった。成瀬は同住宅の2階部分を中心に生活していたことがわかる。

以後部分的な改修が行われながら、現在は成瀬記念館分館として、1階は2つの団体の事務所、2階は成瀬が住んでいた当時の姿を再現し、活用されている。

## （2）住人の変遷

表1は旧成瀬仁蔵宅の住人の変遷を示したものである。成瀬没後、同宅は6人の大学関係者によって住居として使用された。ここでは、建築物保存の意義から、同宅について調査した尾林道子の報告にもとづきながら、さらに考察を深めていきたい<sup>8</sup>。

玉木直

成瀬は同住宅で1901（明治34）年から没する1919（大正8）年まで居住した。その間ひとりで居住していたわけではなく、お手伝いの婆やとともに、1908（明治41）年から玉木直（1873-1938）が1階北側4畳半の部屋に居住し、成瀬家の家政を管理した。玉木の甥、玉木泰男によれば、彼女の部屋は「戸障子の建附が悪い為に冬など隙間風が猛烈に入つて来るあの寒々とした部屋」であったという<sup>9</sup>。

玉木は成瀬が創設した新潟女学校をはじめ、大阪の梅花女学校、そして日本女子大学校と、成瀬の教鞭をとる学舎それぞれに赴き薫陶を受けた人物である。1904（明治37）年、玉木は日本女子大学校家政学部第1回生として卒業すると附属高等女学校の料理教諭となり、翌年同大学校家政学部の料理教授となった。料理に関する新刊書には必ず目を通し、非常に厳格な研究生生活を送ったとい

表1. 旧成瀬仁蔵宅の住人

住人	1901 (M34)	1906 (M39)	1911 (M44)	1916 (T5)	1921 (T10)	1926 (T15)	1931 (S6)	1936 (S11)	1941 (S16)	1946 (S21)	1951 (S26)	1956 (S31)	1961 (S36)	1966 (S41)	1971 (S46)	.....	2005 (H17)
成瀬仁蔵	●																
玉木直 (注1)		●															
高柳治 (注2)																	
井上秀 (注3)																	
大橋広 (注4)																	
J・カーカ ップ(注5)																	
鎌水與平 (注6)																	
四十年史 編纂室																	
若葉会 (注7)																	
WILPF (注8)																	

鈴木賢次ら「日本女子大学成瀬記念館分館(旧成瀬仁蔵住宅)に関する研究」『日本女子大学総合研究所紀要』第7号, 2004年, 117頁より著作作成。

注1: 玉木直(1873-1938)日本女子大学校家政学部第1回卒業生。同校家政学部教授。

注2: 高柳治 日本女子大学校家政学部第3回卒業生。茶道教授。

注3: 井上秀(1875-1963)日本女子大学校家政学部第1回卒業生。同校第4代校長。

注4: 大橋広(1882-1973)日本女子大学校英文学部第3回卒業生。同校第5代校長, 日本家政学会初代会長。

注5: J・カーカップ(1923-)イギリスの詩人。当時日本女子大学文学部英文学科客員教授。

注6: 鎌水與平 日本女子大学職員。

注7: 若葉会 日本女子大学校附属高等女学校および日本女子大学附属高等学校の同窓会。1960年より旧成瀬仁蔵宅に事務所を構え, 1975年に正式に事務所として使用。

注8: 婦人国際平和自由連盟の略称である。1964年から郵便物の受け取りを旧成瀬仁蔵宅にし, 1975年から正式に事務所として使用。

う<sup>10</sup>。肝臓癌で永眠した成瀬は、「私の病気があなた方により研究の機会を与へた」と、自らを被験者にした病人食の研究を玉木らにさせた<sup>11</sup>。玉木に絶大な信頼を寄せていた証であろう。

玉木は1938(昭和13)年に永眠するまで、旧成瀬宅に住み、成瀬の遺品を敬虔に管理し続けた。彼女への甲詞には「成瀬先生亡き後も、一度其の邸宅に入れば、手沢の遺物依然として旧態を改めず、今日猶能く住事を追懐せしむるは玉木先生の力多きに在りと云ひつべし」とある<sup>12</sup>。

高柳治と日本女子大学校四十年史編纂室

玉木の没後、高柳治が居住した<sup>13</sup>。高柳は同校家政学部第3回生であり、当時茶道教授であった。玉木と同じ茶道宗偏流で懇意にしていたことから、旧成瀬宅を管理するために推薦されたといわれている<sup>14</sup>。

これとほぼ同時期、同宅は『日本女子大学校四拾年史』の編纂場でもあった。執筆者であった中村政雄は成瀬の「御旧宅で先生の遺された書籍に埋もれ、お机によつてこの仕事をする時実に文字に書かれたものより以上に多くのアドバイスを受ける気持を強くします」と述べている<sup>15</sup>。また、四十年史の凡例をみると、「本書の編纂は、昭和13年7月から始め、昭和16年7月脱稿した。その間満3年である。編纂室には成瀬先生旧宅階上の書斎が当てられた。校内に於て最も閑寂神聖な場所」とあり<sup>16</sup>、2階洋間の書斎室が編纂室に使用され、そこにはまだ成瀬の蔵書が置かれたままであったことがわかる。

筆者の調査した蔵書からも、当時の資料4冊が紛れ込んでいた。しかし、いずれも「日本女子大学四十年史編纂資料 No. 」とナンバーが付されているので、これらを本調査の対象と混合することはないと思われる<sup>17</sup>。

#### 井上秀

1945（昭和20）年5月、1931（昭和6）年から校長職に就いた井上秀（1875-1963）が戦災に遭い、夫雅二とともに同宅に仮寓した<sup>18</sup>。当時、日本女子大学の機関誌であった『家庭週報』第1618号〔1947（昭和22）年4月25日付け〕の「消息」欄によれば、井上は「昨年末より熱海市桃山町万平ホテル上に居住」とある<sup>19</sup>。すなわち、1946（昭和21）年末に旧成瀬宅から熱海へ移転したことになる。

しかし、GHQ/SCAP 文書には井上が「教職不適格と判定され、追放になったのちも、政治力を発揮している。熱海に転居するとしながらも、依然として、学内にある創立者の住まいにとどまっております……」という投書が記録されている<sup>20</sup>。井上が公職追放によってすべての公職を退いたのは、1947（昭和22）年2月のことである。この投書は、日付および差出人は不明ではあるけれども、日本女子大学成瀬記念館の調査から、同年4月と推定されている。おそらく大きな誤差はないと思われる。井上は公職を退いた後も、旧成瀬宅に留まったか、あるいは宿泊しながら新制女子大学設立のために影ながら尽力したのではないかと考えられる。そして1947（昭和22）年6月、夫雅二は熱海の地で逝去した。これらのことを勘案すると、井上は1945年5月から1947年の少なくとも春頃までの2年近く、旧成瀬宅に居住していたのではないかと考えられる。

#### 大橋広

1948（昭和23）年日本女子大学が新制大学に認可されるに伴い、学長に就任した大橋広（1882-1973）が居住した。成瀬の死後、大橋は旧成瀬宅の形容を「如何にも粗末な、如何にも形の珍しい」と述べたが、その「粗末な」旧成瀬宅に、彼女は退職する1956（昭和31）年までの10年近く住んだ<sup>21</sup>。

#### ジェイムズ・カーカップ

大橋に次いで1966（昭和41）年から、当時同校文学部英文学科客員教授であったイギリスの詩人 J・カーカップの宿舍となった。外国人教員のゲスト・ハウスである。

1959（昭和34）年初来日したカーカップは、東北大学で教鞭をとった。母親の病気悪化のため2年で一旦帰国したが、日本への慕情やみがたく1962（昭和37）年再度来日し、1964（昭和39）年より日本女子大学文学部英文学科に着任した<sup>22</sup>。

カーカップの随筆集『病める国、イギリス』（英潮社、1967）の訳者である三浦富美子によれば、カーカップは「もしわたしに前世があつたとすれば、たしか、わたしは日本人だつたろうと思う時がよくある」というほど日本に愛着を抱いていたという。三浦が旧成瀬宅にカーカップを訪ねてみると「お香をたかれ、玉露とお菓子をもてなして下さり、ある時はきつちりと着物を召していられた」という<sup>23</sup>。カーカップの旧成瀬宅に対する随想は管見では見当たらない。しかし三浦の言辞からは、同宅に対しての良い印象がうかがえる。

#### 鎌水與平

1970（昭和45）年から、同校職員、当時管財課所属であった鎌水與平が1階北側の部屋に管理の目的で3年間居住した。鎌水は旧成瀬宅の最後の居住者となった。

### (3) 戦前の住人と2階部屋の関係

旧成瀬宅は、成瀬没後6人の大学関係者の居住場となった。しかし彼ら居住者は、成瀬の遺品や蔵書のある2階部屋を使用していたわけではないようだ。とくに、戦前の住人たちは、2階を成瀬の生存時と同じ状態に保つよう管理した。

後述するように、1976(昭和51)年4月から1983(昭和58)年8月まで、旧成瀬宅に管理されていた、成瀬の遺品や蔵書の整理にあたった木下けいによれば、成瀬没後も同宅2階は学生たちの瞑想の場として使用されたという<sup>24</sup>。たとえば、木下は師範家政学部を1930(昭和5)年に卒業した。成瀬逝去後の入学であるから、当然成瀬から直接教えを受けたわけではない。けれども、何度も旧成瀬宅へ赴き、2階和室にあった成瀬の寝台に腰をかけ瞑想にふけたという<sup>25</sup>。目を閉じて心静かに思いめぐらす場が旧成瀬宅の2階なのである。当時の大学関係者にとって、そこは神聖な場であった。木下は「恐れ多くて2階を日常生活に使うことは考えられない」という<sup>26</sup>。

戦前においては、前述した玉木直や彼女から旧成瀬宅の管理を引き継いだ高柳治、そして居住者ではなかったけれども仁科節<sup>27</sup>の存在などを考えると、成瀬の蔵書が各住人個人のもものと混同、使用されることはなく、それどころか、徹底して管理されたのではないかと考えられる。

## 3. 蔵書の疎開

### (1) 戦中の疎散

戦中になると成瀬の蔵書は疎開された。『家庭週報』に以下のような記事を確認することができた。

「帝都防衛の完璧を期して、今東京都内の疎開事務は着々と行はれてみますが、本校でも種々の重要物品を西生田へ疎開してゐる中に、成瀬先生の記念品を戦ひの災火から護るべく、この度いよいよ全部的に疎開しました。

成瀬先生の記念品は、校内の先生の終焉の家に先生在りし日のまま保存されてゐた図書及び什器が主なものですが、中でもお2階の書斎を埋める2千冊近い蔵書は、戦争が始まった頃に一部疎開されてゐたものの、大々的にこのお部屋から動かされるのは先生御永眠後初めてのことで、毎日学生さんが何十人づつお手伝ひして、現在この記念の家を守られてゐる本会(筆者注:桜楓会<sup>28</sup>)の高柳治子氏は荷造りに真無になつてゐられます<sup>29</sup>。

この記事は1944(昭和19)年3月のものである。時局はいよいよ緊迫し、成瀬の蔵書は西生田へ大がかりに疎開された。西生田とは当時の神奈川県橋樹郡稲田町字菅で、現在の同県川崎市にあたる。1934(昭和9)年「女子総合大学構想」のため、手狭な目白校地から移転先として選定され、1942(昭和17)年から授業が始められた。東京から比較的近く、豊かな自然に囲まれた地であった。

一方、蔵書は軽井沢に疎開されたという説もある。1906(明治39)年、日本女子大学校は長野県軽井沢に夏季用の学寮「三泉寮」を設置した。1943(昭和18)年から1950(昭和25)年までは戦争のため使用を中止していたが、1944(昭和19)年から終戦までは、附属小学校の児童約100名の集団疎開地であったし、大学校生の勤労働員用の宿舎でもあった<sup>30</sup>。ここに成瀬の蔵書は、彼の「逝去後、玉木直先生、仁科節氏などにより大切に保管されてきたが、大戦をはさんで軽井沢三泉寮へ

分散」されたというのである<sup>31</sup>。

どうやら、成瀬の蔵書は西生田や軽井沢に疎散されたようだ。「大々的」に疎開させたと『家庭週報』の記事にはあるけれども、実際成瀬の蔵書すべてが、西生田や軽井沢のような安全な地に移されたかは不明である。常識的に高価な洋書や和書から優先に移動したと考えられる。

## （2）成瀬文庫目録

戦後の混乱のなか、西生田や軽井沢に疎散した成瀬の蔵書はどうなったのであろうか。当時の適切な資料は見当たらない。しかし、1951（昭和26）年に竣成した新校舎泉山館に、蔵書も含めた成瀬の遺品は集められる予定であったし<sup>32</sup>、図書館員が成瀬の蔵書整理を、1952（昭和27）年から正式に着手し始めたので、それまでに東京に戻ってきたことは確かである。

蔵書整理はおおよそ6年かかり、その成果として『成瀬文庫目録』（日本女子大学図書館編刊、1979）が作成された。これらの蔵書は「成瀬記念文庫」と呼ばれた。ここには、単行書のみ、洋書1919タイトル、和書481タイトルが納められ、疎開前の「2千冊近い蔵書」から冊数が増加したものの、減少してはいない。疎開中に、成瀬の蔵書は紛失離散することなく東京に戻ってきたと考えるのが妥当であろう。

ちなみに『成瀬文庫目録』の目録は、いわゆる図書館の分類部門のすべてにわたった。成瀬の蔵書は、特定の主題を中心に収集されたものではないことがわかる。成瀬が女子教育に必要と思われる当時の新刊書を、懸命に購入したものと推察されている<sup>33</sup>。

## （3）単行書以外

『成瀬文庫目録』には単行書のみが納められたので、雑誌やパンフレット、カタログなどの類は同日録からあぶれた。当時図書館員事務主任であった相馬文子は、同日録の構成が単行書のみで、成瀬の残した「雑誌、パンフレット等の類もあるが、現在いまだ未整理である」、「図書館では学内に散逸していた成瀬先生関係、並びに種々の校史関係資料を、事ある毎に、（例えば老朽化した建物等を取りこわす都度）亡失しないように集めて来たが、その数たるや夥しく、このまま放置しておく訳には行かず、図書館友の会<sup>34</sup>、或いは臨時職員の協力を頼って、館員の専門的な指導により、徐々に整理を始めている」と述べている<sup>35</sup>。ここで相馬のいう「雑誌、パンフレット等の類」は、



写真2．成瀬記念館

疎開先から再び東京へ戻ってきたもの、戦中も日本女子大学校内に留まり、戦後、校舎などを取り壊す際収集されたもの、の2とおり考えられる。

1973（昭和48）年以降、こうした未整理資料は成瀬記念文庫とともに、日本女子大学目白図書館6階の「天井の低い、殆んど物置同然の書庫」に置かれた<sup>36</sup>。1984（昭和59）年に成瀬の蔵書や遺品を一向に集めた「成瀬記念館」（写真2）ができるまで、ここは、年代によって名称は変わるけれども、「成瀬記念室」や「成瀬記念館設立準備室」と呼ばれた<sup>37</sup>。

#### 4. 戦後の旧成瀬仁蔵宅の整理 (1976 - 1983)

##### (1) 旧成瀬仁蔵宅での作業 (1976 - 1977)

旧成瀬仁蔵宅の遺品整理は、住宅の老朽化に端を発した。この頃、日本女子大学を退職した木下けい子が遺品整理の適任とされ、この作業にあたった。前記したように、木下けい子は、1930(昭和5)年日本女子大学校師範家政学部を卒業した。卒業後は大学に残り、家事の教諭や「指導者」と呼ばれたクラス担任をして、学生の修養と研究の援助を行った。そして、戦後は「寮監」として、寮で生活する学生の指導にあたった人物である<sup>38</sup>。学内の戦前・戦後の歴史に詳しいことから、適任者と目されたのであろう。

木下の最初の作業は、旧成瀬宅の2階押し入れなどの清掃から始められた(図2)。遺品や蔵書などは、この押し入れに収納され、新聞紙などに包んで大切に保管されてあったという。ここには、成瀬逝去後「何回か手の付けられたもの」、「殆どそのままのもの」、「あまりにも貴重な遺品」、「広範にわたる諸種の資料」があった。蔵書に関していえば、疎開の時点で選別されたので、旧成瀬宅に残った蔵書の数々は、軽井沢や西生田のような安全な地に疎開されたものと比較すると、戦火に見舞われてもある程度あきらめのつくものであった。それは、木下が蔵書をさして使う「広範にわたる諸種の資料」や「文献」といった言葉から理解できる。戦後の旧成瀬仁蔵宅には、「あまりにも貴重な遺品」はあったが、蔵書は種々雑多の雑物であったといえよう。

初年度はこれらを特殊資料と蔵書に類別した。特殊資料には、額・軸類・日用品・食器・家具調度品・衣類などが分類された。額・軸類はカードに記載し、日用品・食器・家具調度品・衣類はリストにした。

遺品の大分類を1年かけて終わると、旧成瀬宅の防災上の安全をはかり、特殊資料のうち、家具と衣類はそのまま残し、他のものは未整理の蔵書とともに、図書館6階の成瀬記念室へ移管した。木下は「旧宅の作業は日毎が感激だった」という語録を残している<sup>39</sup>。

##### (2) 成瀬記念室での作業 (1977 - 1983)

成瀬記念室へ移された資料は、写真・書簡・蔵書などさらに細分類された。写真担当であった木下は、「既に未整理のまま記念室にあった写真」と「旧宅から搬入された写真類」を併せ、「校舎風景」「人物」「学生生活」「寮生活」「附属校」「桜楓会」「その他」に分類し、カードに記載した。ひとつひとつ文献にあたり、撮影年月日、人名などの信憑性を期した。こうした地道な作業によって、3年後の1978(昭和53)年には、額・軸などを195点、日用品・食器などを79点、写真を1080点、整理することができた。書簡については、「図書館友の会」が長年整理を進め、また、未整理の雑誌・パンフレット・一枚ものの文献類などの整理も本格的に始められた。

成瀬記念室での作業最終年にあたる1983(昭和58)年には、総数7000点以上の資料を収集・整理した。現在、これらの資料は成瀬記念館に収蔵され、研究資料や展示品として活用されている。また、木下が整理した膨大な写真のうち約400枚は、『図説 日本女子大学の八十年』(日本女子大学編刊、1981)に掲載された。各教育機関が発行する多々ある学園史のひとつではあるけれども、女子高等教育の一側面を、写真をとおして知る機会を我々に与えたのは、気の遠くなるような地道な作業があつてのことである。



### （3）蔵書の流れ

成瀬記念室での作業のなかで、注目しておかなければならないことがある。それは、「既に未整理のまま記念室にあった写真」と「旧宅から搬入された写真類」を「併せた」ということである。ここでは写真に限っているけれども、おそらく旧成瀬宅から搬入された家具と衣類を除いた特殊資料と、未整理の蔵書も同様であろう。すなわち、「既に未整理のまま記念室にあった」蔵書と「旧宅から搬入された」蔵書は、ここで一緒になった。

先に述べたように、成瀬記念室に置かれた「既に未整理のまま記念室にあった」成瀬の蔵書は、「雑誌、パンフレット等の類」であったがゆえに、成瀬記念文庫の選定にもれたものであった。これらの出所は、疎開先から再び東京へ戻ってきたもの、戦中も日本女子大学校内に留まり、戦後、校舎などを取り壊す際収集されたもの、の2とおり考えられた。そして、ここに「旧宅から搬入された」蔵書、すなわち疎開の選定にもれ、戦中も旧成瀬仁蔵宅に留まり、戦後、同住宅の2階押し入れから発掘されたものが加わった（図3）。

これらは一同に成瀬記念室に集められ、地道な分類とカード化の作業によって整理された。この作業において、一方は成瀬記念文庫や校史資料として保管する価値のあるもの、もう一方は雑物として整理する価値のないもの、という2つの選択がなされたと思われる。1984（昭和59）年に先述

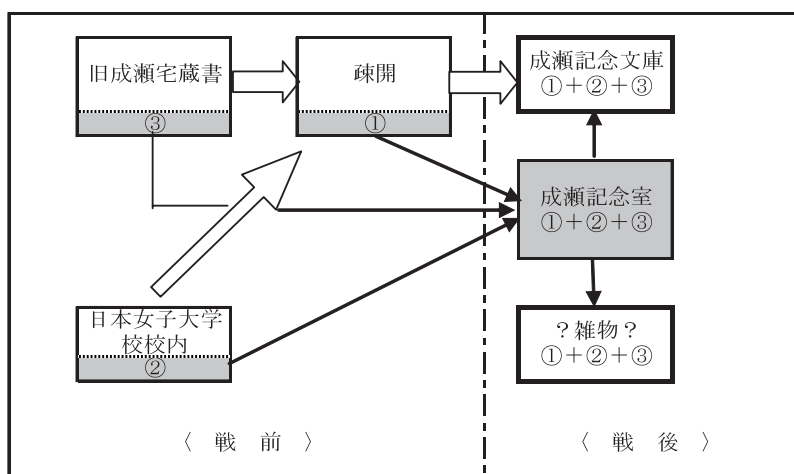


図3．蔵書の流れ

した「成瀬記念館」が落成すると、前者はこぞってここへ移管された。なぜならば「成瀬記念館」は、旧成瀬宅の整理をきっかけに、貴重にして浩瀚な資料を安全に未長く収納し、有効に活用する建物の必要性を訴える声から建てられた記念館だからである。現在、成瀬記念館では成瀬の蔵書、和書約500冊、洋書1900冊余を展覧できる。しかし、後者の雑物として烙印を押された蔵書は、どこに保管されたのか、または処分されたのかは不明である。

## 5．おわりに

本稿は成瀬仁蔵の蔵書の流れを、旧成瀬仁蔵宅とその住人・蔵書の疎開・旧成瀬宅の戦後の調査

という3つの歴史的事項から整理した。

日本女子大学の図書館は1906(明治39)年に建設されたが、1914(大正3)年に出火という災難に見舞われ、建物自体の消失は免れたけれども、書籍は水浸しとなり多くの損失を生じた。さらに、関東大震災には建物が崩壊し、ここでも多くの書籍を失った<sup>40</sup>。戦中は旧成瀬宅の蔵書と同様、疎開され、難を免れたが、火災や震災で失った図書が残存していたらと、切歯扼腕するばかりである。一方、旧成瀬宅は粗末ながらも現存し、ここにあった成瀬の蔵書は、彼をとりまく人々の管理・整理によって、今日まで大切に保存されてきた。幸運であったといわざるを得ない。しかしこれらのなかから、木下が「どうしようもない雑物は図書館にお返しした」と述べるものの存在が明らかになった<sup>41</sup>。これらは雑物の烙印を押され、どこにあるのかわからない。

冒頭に述べたように、本研究の課題は、旧成瀬仁蔵宅敷地から発見された蔵書の出自を明らかにすること、成瀬の家政学におけるカリキュラム作成について何らかの示唆を得ることの2点であるが、第1報では序論として、蔵書の整理に留めたため、課題は残ったままである。存在が浮き彫りになった雑物といってもよい成瀬の蔵書は、本稿の調査対象であるのかどうかも含めて、稿を改めて報告したい。

本稿は、第52回日本家政学会中国・四国支部研究発表会(2005年10月2日)において発表した内容の一部である。木下けい氏からは、貴重な数々のお話を賜りました。心より感謝申し上げます。

## 註

<sup>1</sup> たとえば、丸善の洋書担当者であった福本初太郎は以下のような記録を残している。

「目白の日本女子大学図書館には、かなりの洋書があった。それは初代の学長成瀬仁蔵先生が無類のビブリオファイルであったためでしょう。先生は教育者であると同時に『政治家』でもあった。先生は学校の図書館に買い入れる本を、ご自分で本棚からあまり選ばれることはしなかった。丸善へおいでになると、まず、どっかりと椅子に腰かけられて、私が挨拶に行くのを待たれた。私は先生の興味を持たれそうな、婦人問題、文化の問題、あまり専門的でない政治問題等の本を新刊書の棚から探し集めて先生のテーブルへ運んだ。先生はそのなかの2、3冊をペラペラと見ておられるうちに、やがて、スヤスヤと眠られてしまう。しばらくすると眼をさまされて曰く、『これを図書館へ届けて呉れ』と、いとも厳かに言われる。その場合いつも1冊残らず全部であった。こうなると、こちらも本を選ぶのに真剣にならざるを得ない(『丸善百年史』下巻、丸善、1981年、902～903頁)。

<sup>2</sup> 以下の3冊である。

*The chemistry of cooking and cleaning: a manual for housekeepers*, Boston, Whitcomb and Barrows, 1897.

*The cost of food: a study in dietaries*, New York, John Wiley, 1902.

*Home sanitation: a manual for housekeepers*, Boston, Whitcomb and Barrows, 1904.

<sup>3</sup> 湯川次義『近代日本の女性と大学教育』不二出版、2003年、92頁。

<sup>4</sup> 旧成瀬仁蔵宅については以下の文献を参考にした。鈴木賢次「成瀬記念館分館(旧成瀬先生住宅)の調査」『日本女子大学紀要 家政学部』第42号、1995年、33～39頁。鈴木賢次・後藤久・尾林道子・沼田早苗・渡邊保弘「日本女子大学成瀬記念館分館(旧成瀬仁蔵住宅)に関する研究」『日本女子大学総合研究所紀要』第7号、2004年、99～158頁を参考にした。

- <sup>5</sup> 『日本女子大学校学報』第1号，1903年，163頁。
- <sup>6</sup> 1924（大正13）年完成。大橋了介については「日本女子大学校を描いた大橋了介」『成瀬記念館』No. 2, 1986年，56～59頁参照。
- <sup>7</sup> 『家庭週報』第739号，1924年，4頁。
- <sup>8</sup> 尾林道子「現状および保存状態」の表 -1（鈴木賢次・後藤久・尾林道子・沼田早苗・渡邊保弘「日本女子大学成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）に関する研究」『日本女子大学総合研究所紀要』第7号，2004年，117頁）。
- <sup>9</sup> 桂花会編『玉木直子先生』桜楓会，1941年，99頁。
- <sup>10</sup> 新潟女性史クラブ『雪華の刻をきざむ』ユック舎，1989年，55頁。
- <sup>11</sup> 玉木直子・大岡薫枝「先生御病中の御食事に就て」『成瀬先生追懐録』桜楓会，1928年，399頁。
- <sup>12</sup> 『家庭週報』第1394号，1938年，4頁。
- <sup>13</sup> 『家庭週報』第1402号，1938年，2頁。
- <sup>14</sup> 旧成瀬宅に居住はしていないけれども，玉木の後，成瀬の遺品や蔵書を管理したのは仁科節（1885 - 1970）であったといわれている。仁科は日本女子大学校国文学部を卒業後，『家庭週報』の編集に携わり，成瀬の晩年の助手でもあった。
- <sup>15</sup> 『家庭週報』第1405号，1938年，2頁。
- <sup>16</sup> 中村政雄編『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校，1942年，凡例1頁。
- <sup>17</sup> 確認できた4冊は以下のものである。  
文部省官房編刊『時局ノ教育ニ及セル影響取調』1904年（日本女子大学校四十年史編纂資料No.18）。  
文部省官房編刊『文部省夏期講習会ニ於ケル久保田文部大臣演説』1904年（日本女子大学校四十年史編纂資料No.17）。  
成瀬仁蔵『大学教育法改善案 - 附エリオット教授四十年間の経験』1916年（日本女子大学校四十年史編纂資料No.9a）。  
文部省普通学務局編刊『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』1917年（日本女子大学校四十年史編纂資料No. ）。
- <sup>18</sup> 井上秀先生記念出版委員会編『井上秀先生』桜楓会，1973年，206頁。
- <sup>19</sup> 『家庭週報』第1618号，1946年，25頁。
- <sup>20</sup> 国立国会図書館憲政資料室所蔵 GHQ/SCAP RECORDS Mrs. Inouye's Attitude Since She was Formally Purged [sheet no. CIE(B)-06018]（日本女子大学成瀬記念館編刊『新制日本女子大学成立関係資料 - GHQ/SCAP 文書を中心に』2000年，において同レポートは日本語の要約とともに掲載されている）。
- <sup>21</sup> 大橋広遺稿編纂会編刊『大橋広遺稿集』1974年，267頁。
- <sup>22</sup> 日本女子大学編刊『昭和39年 学事報告』1965年，60頁。
- <sup>23</sup> 三浦富美子「カーカップ先生と日本」『桜楓新報』1968年，5頁。
- <sup>24</sup> 筆者は2005年9月19日，木下けい氏宅で聞き取り調査を行った。その時の談である。
- <sup>25</sup> 同上。成瀬は瞑想を重視した。教育実践のなかに取り入れられ，寮舎においては毎朝起床後15分間の瞑想時間がもうけられた。
- <sup>26</sup> 同上。
- <sup>27</sup> 註14参照。
- <sup>28</sup> 日本女子大学校の同窓会の名称。単なる同窓会ではなく「研究とその活動により社会改善に資する」ことを目標とし，社会事業や平和運動など積極的に参加した。
- <sup>29</sup> 『家庭週報』第1607号，1944年，12頁。
- <sup>30</sup> 日本女子大学編刊『日本女子大学学園事典』2001年，140～141頁。

- <sup>31</sup> 木下けい「限りない心の安らぎと糧」『成瀬記念館』No.10, 1994年, 96頁。また, 日本女子大学成瀬記念館編刊『成瀬記念館』No.1, 1984年, 46頁にも同様の記述がみられる。
- <sup>32</sup> 大橋広「1951年3月4日」『家庭週報』第1632号, 1951年, 1頁。
- <sup>33</sup> 相馬文子「成瀬記念文庫目録発行に添えて」『日本女子大学成瀬文庫目録』日本女子大学図書館, 1979年。
- <sup>34</sup> 大学の中心となる図書館の充実発展を図りつつ会員のために文化活動を行う会。現在, 日本女子大学教職員, 卒業生, 在学生およびその父母を含めて, 約500人の会員がいる。
- <sup>35</sup> 相馬文子「成瀬文庫目録(和書篇)について」『日本女子大学図書館だより』No.35, 1976年, 8頁。
- <sup>36</sup> 同上。
- <sup>37</sup> 1973(昭和48)年から1982(昭和57)年まで「成瀬記念室」, 1983(昭和58)年から1984(昭和59)年まで「成瀬記念館設立準備室」と呼ばれた。
- <sup>38</sup> 2005年9月19日木下けい氏談。以下木下けい氏の成瀬遺品整理については, 木下けい氏の「声 成瀬記念室より」『日本女子大学図書館だより』No.41, 1979年, 4頁, 「遺品整理の奉仕をして」『桜楓新報』1984年, 5頁, 「限りない心の安らぎと糧」『成瀬記念館』No.10, 1994年, 96~99頁, そして 註24, を参考にした。
- <sup>39</sup> 同上, 97頁。
- <sup>40</sup> 相馬文子「図書館のあゆみ(3)」『日本女子大学図書館だより』No.29, 1973年, 4頁。
- <sup>41</sup> 註24と同じ。

(2005年10月21日受理)